

一、佛在所には、しゆたつ長者、祇園正舎をたて、供養の時、釋迦如來御說法ありしに、提婆一萬人の外道をともない、木の枝條の葉にしてを附て、をとりさげめば、御供養のべかたかりしに、佛、舍利弗に御目を加へ給へば、佛力をうけ、御後戸にて、鼓、しやうごをと、のへ、阿難の才覺、舍利弗の智恵、富樓那の辯説にて、六十六番の物まねをし給へば、外道、笛鼓の音をききて、後戸にあつまり、是を見て静まりぬ。其隙に如來供養を宣給へり。それより天竺に此道は初る也。

〔考異〕(一)供養の時—宗節本、御供養の時。(二)加へ給へば—宗節本、かけ給へば。

〔口譯〕天竺に於ては、須達長者が、祇園精舎を建立して、佛を供養し奉つた時、釋尊が御說法をせられたが、その時提婆が一萬人の外道を引きつれ、木の枝や篠の葉に幣を附けた物を持ち、大聲で歌ひ踊つたので、釋尊は御說法遊ばし難かつた。その時、釋尊が舍利弗に目くばせなされると、舍利弗は直に佛力を感じ、御後戸に於て、鼓や鉦の樂器を揃へ、阿難の才覺、舍利弗の智恵、富樓那の辯舌を以て、六十六番の物真似をせられたところ、外道共は、笛や鼓の音を聞いて後戸の方に集つて來、その物真似を見物して騒ぎが止んだ。その間に、釋尊は御說法を遊ばした。かうした事から、天竺に於て、此の猿樂の道が始まつたのである。

〔語釋〕○佛在所—天竺、印度のこと。○しゆたつ長者—須達多といふ富豪の意。この人は波斯匿王の大臣で、貧民を愛憐した人として有名である。○祇園—祇園精舎、祇園の略稱。須達多が釋尊のために、この地に精舎を建立した所。○精舎—佛道に精練修行をつむ者の居る家の意で、寺と考へて良い。祇園精舎は祇園寺といふほどの意。○供養の時—釋尊を供養した時の意。○提婆—人名である。釋尊の近親の者であつたが、釋尊を嫉視して、種々の危害を加へた人物。佛教では、悪人の代表の如くいはれてゐる人物である。○外道—内道に對する語。佛教以外の教へを信ずるものを、佛教者の方からは外道といふ。○御供養のべがたかりし—この御供養といふのは、御說法といふほどの意味に用ひてゐる。○舍利弗、阿難、富樓那—何れも釋尊の高弟である。○目を加へる—目くばせをする。○御後戸—納所は元來は衣服器具等を納めておく室をいふ語であるが、ここでは、精舎の後方の室といふほどの意に用ひたものであらう。

一、日本國においては、欽明天皇の御宇に、大和國泊瀬の河に、興水のをりふし、河上より一のつぼながれくだる。三輪の杉の鳥居のほとりにて、雲客此つぼをとる。中にみどり子あり。たちちうわにして玉のごとし。是ふり人なるがゆえに、大裏に奏聞す。其夜、御門の御夢に、みどり子のいはく、「我はこれ、大國秦の始皇のさんなんなり。日域にきえんありて今、現在すと云々」。御門きどくにおほしめし、殿上にめさる。せいじんにしたがひて、才智人に超て、年十五にて、大臣の位にのぼる。秦の姓をくださる。しんといふ文字「はた」なるが故に、秦河勝是なり。